

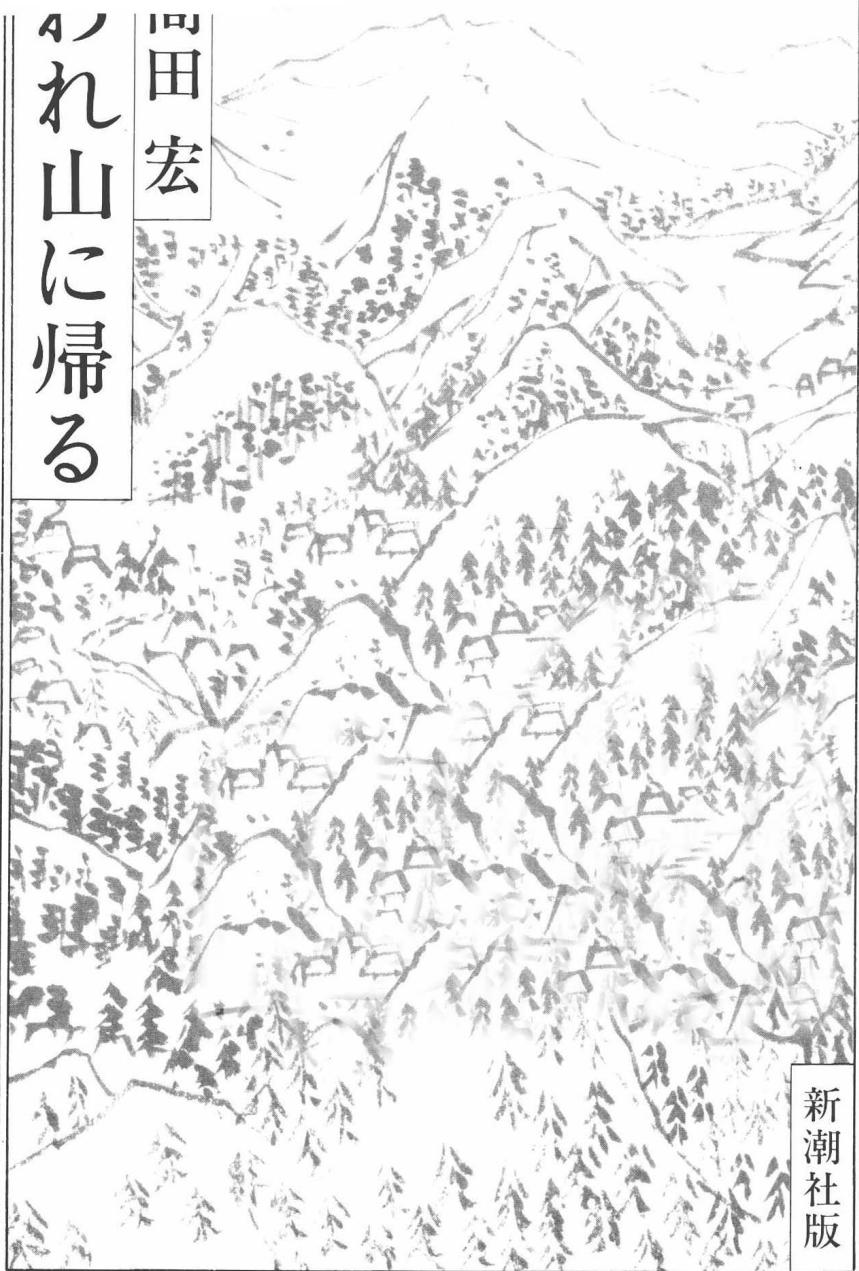
われ山に帰る

高田 宏



新潮社版

山田 宏
ふれ山に帰る



新潮社版

われ山に帰る^{やま かえ}

著者 高田 宏（たかだひろし）

昭和五十七年十月一日印刷

昭和五十七年十月五日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 大口製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一二〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

われ山に帰る*目次

序章 革命

7

第一章 球磨の泣き虫

21

第二章 山国の女

47

第三章 無頼の夢

72

第四章 帰りなんいざ

110

第五章 破門

130

第六章 小さなユートピア

151

第七章 国などいらぬ

176

第八章 こどもらよ！

201

第九章 山の民

218

終章 帰鳥

238

あとがき

255

主要参考資料

259

われ山に帰る

少きより俗に適うの韻べなく
性もと邱と山とを愛せしに
誤って塵網の中に落つ

陶淵明

序章 革命

岩手輕便鉄道は東北本線花巻駅で乗りかえる。終点の仙人峠駅まで、おもちゃのような蒸気機関車が、これもおもちゃのような客車を二輛ひっぱって、北上山地をぬってゆく。時刻表どおりには走らない。小半日はゴトゴトゆられてゆくらしい。

「見ろよ、山が燃えとるばい」

冠雪の早池峯^{はちね}が朝の太陽に染まっていた。血の色で遠く空を切っている。近い山々は赤と黄の氾濫だった。ほかの色はないにひとしい。全山の紅葉が焰となつて燃えあがり、北上の最高峰を焼いているかと思われた。

一行七人のうち眠っていないのは、眉が横一文字に濃い、この男だけだ。南国生れの青年は、こういう紅葉を見たことがない。九州、球磨^{くま}の山々谷々では常緑樹が多く、山はいつも青い。秋がふかまると落葉樹だけが点々と色づいた。東北の山々が彼のからだの底をゆさぶる。めまいに似ていた。車窓に額をつけているのは、風景を見るためであり、その風景にふるえそうになるからだを支えるためでもあった。小山勝清^{こやまかつきよ}、数え年二十四である。

「小山さん、あんたも寝ておきなさんと……。着いたら大事おおごとですばい、何がおこるかわからん」

半分丁寧半分ぞんざいに、長髪の男が目をつむったまま言う。一つ年上の高尾平兵衛だ。

大正八年十一月二日、七人の行先は釜石の鉱山と製鉄所である。

大日本鉱山労働同盟会の二人の顧問、福田秀一と綱島正興、足尾銅山からの三人、そして小山と高尾、この七人であった。福田は中年の貧乏法学士で、ひげをピンと立てたところは明治の学者をおもわせる。綱島は若手の弁護士、小山や高尾といくつもちがわれないが冷静な理論派の落着きが顔にも出ている。小山青年の目に福田法学士は、まかりまちがえば相手と刺しちがえる「本気もん」と映り、綱島弁護士は、大政治家をころさず秀才野心家と見えていた。

福田と綱島は二ヶ月前、栃木県の足尾銅山へ出かけて労働組合を組織してきた。大日本鉱山労働同盟会である。名前からは全国の鉱山労働者の組織と思われそうだが、実際には足尾に生れたばかりの、まだ小さな団体だ。それでも足尾銅山一万二千人のうち、すでに四千五百人が加わり、会員は日を追って増えていた。七人の男たちの旅は、釜石鉱山に同盟会の支部を組織しようとするものであった。

大正三年夏にはじまった第一次世界大戦で、銅も鉄も増産につぐ増産だった。海外からの輸入がとまり、それだけでも生産が間にあわない上に、逆に海外交戦国への輸出が増えていった。もちろん価格は上昇する。他産業にも増しての戦争景気だった。しかし、鉱山にはたらく者には、それは労働強化でしかなかった。飯場頭が荒くれどもを使って鉱夫たちの尻をたたく。疲れはてて、棟割長屋にもどっても、女房子供に口をきくのがおっくうになる。労賃を上げてくれるなら我慢しようが、そんな気配もない。吐け口のない不満が、ゆっくりと、大量にたまっていた。

鉱山労働はきつい。採鉱夫、支柱夫、雑役夫、どの仕事もからだを酷使する。佐渡金山の水替

無宿たちは罪もないのに捕えられ、江戸から佐渡まで唐丸籠で送られて、強制労働のうちに若くして死んでいった。明治になって機械化されたとはいっても、しょせん穴の中のことだ、機械が人間を楽にしてくれるわけではない。事故の危険がなくなったわけでもない。「坑夫六年、熔鋳八年、婢ばかりが五十年」は冗談ではなかった。

明治四十年、足尾銅山で大争議があった。その前の年あたりからうたわれた歌がある。

金銀銅鉄石炭を

もしも掘る人世になくば

文明社会は闇となる

坑夫の値打はここにある

これほど尊い労働者を

豚の住む様な家に入れ

南京米でこき使い

果ては解雇かあほらしい

何の因果か我々は

日本に生れて支那の米

暗き所で働きて

それでも借金殖えてくる

ドベラが落ちて惨死して

妻と子供で四人連れ

二十五円の涙金

人の命は安いもの

大正になっても、おなじことだ。もっと悪いことに、大戦景気が村の人びとを町の工場にあつめてしまつて、村に人手が足りなくなり、米の穫れ高が減つてきた。商人は買い占める、村人は売りおしむ。米の値段は二倍、三倍と上がった。富山県魚津町で漁民の女房たちが、米を高値で県外へ出そうとする米屋をおそつたのがきっかけで、全国各地に米騒動がひろがつた。七十万人が加わり、八千二百人が検挙された。大正七年、昨年の夏から秋のことだ。

米が上がる、つられて何もかも上がる。もううぶんは変らない、お金の値打は下がる。休みなしに働いても、「それでも借金殖えてくる。」

その十一月にドイツが降伏して大戦がおわつた。大戦景気の反動がきて、不況の嵐である。暮らしはますます苦しい。

釜石鉱山の人びとの不満はたまりつづけていた。ときおり待遇改善要求の会合をする者があつたが、中心になつた者がくびを切られた。

岩手軽便鉄道で釜石へむかう七人は、その人たちのなかに、労働組合という組織をつくろうとしていた。足尾からの三人のひとりに、小森田民次郎がいる。彼は去年の秋まで弟と二人で釜石の採鉱夫をしていたのだが、弟が作業中に大怪我をして死亡した。北海道の炭鉱からずつといつしよに働いてきた弟だった。その弟の死に対して、会社の扱いは冷淡そのものであった。死亡手当もうすい。人の生命を何と思つてゐるんだ、おれたちは牛でも馬でもない、人間だ。鉱山事務所に抗議した小森田は十五円と不穩分子の名をもらつて釜石を逐われた。その後足尾銅山に就職

していたのだが、足尾に同盟会ができると、集まりの席で釜石鉾山の仕打を訴え、鉾夫待遇のひびきを話した。この小森田が、釜石行の先導役であった。

軽便鉄道は遠野盆地をすぎて山にかかる。線路に沿う川が狭くなり、紅葉の山が車窓にせまって、やがて仙人峠だ。

駅から先は徒歩で峠道を登る。峠を越えて急坂を下ると釜石へ通じる軽便鉄道の起点、大橋駅へ出るのだが、そこまで六キロ、三時間ほどの山歩きである。金をおしまなければ駕籠がある。駕籠かきは農家の副業になっていた。重い荷物はスキーリフトに似た索道で運んでくれる。

一行は荷物といって、たいした物はない。そのまま峠登りにかかった。ブナの紅葉がまぶしい。おくれぎみの福田法学士に合わせながらだが、それでも汗ばんでくる。

「水に錢ばはろうたのは、はじめてですたい。ばってん、うまかですな」

峠の茶屋の一杯二銭の水を飲んで、高尾平兵衛がわらっている。くったくのない笑顔だ。

峠から太平洋が一望され、アメリカ行であろう貨物船が見えていた。

福田法学士と綱島弁護士は、釜石での作戦を話しあっている。

小森田民次郎は、釜石を解雇されて大橋側からこの峠を越えた日のことを思い出していた。弟の遺骨を手に、峠の頂上で、「おぼえてろよ、今にしろ」と、押し出すようにつぶやいたものだった。私怨をはらしに来たわけじゃない、だが今度は負けられぬ。

小山勝清は、紅葉のなかを歩いてきて、酒に酔ったような気分だった。いい気分なのだ。人並みはずれて酒につよい男だが、これは風変りな酔いであった。その酔いのなかに、ふるさと球磨の山々の記憶がまじってくる。ここに来る前、福田さん綱島さんについて足尾へ行ったときにも、足尾線に沿う渡良瀬川の溪谷を、一瞬、球磨の川谷と錯覚した。あれ以来かもしれない、東京に

いるときには思い出さなかった球磨の山々が、目の底というより、からだの底から揺りうかんでくる。

ホームシックなんていう、しゃれたもんじゃないかと。今日、花巻からの軽便鉄道で、五つめぐらいに晴山駅があった。晴山。熊本県球磨郡四浦村晴山。おれは駅名を見たとなんに、北嶽の麓の山の村にいた。そして、晴山駅をすぎたころ、あの全山焰の紅葉だった。孫悟空の雲に乗ってまばたくまに異郷へ飛んだようなものだ。——しかし、こんな気持はこの峠の頂上で打切りだ。福田さんらは、鉱夫たちを地獄暮しから解放することだけを考えている。そのための労働組合づくりだ。わるく言えば浪花節だ。おれはちがう。彼らを革命的労働者にきたえあげるんだ、今に革命の渦になげいれてやるんだ……。

峠を下ると大橋駅、ここに釜石鉱山があり、鉄鉱石は釜石鉱山軽便鉄道で釜石の町にある製鉄所へ送られる。

一行は「大日本鉱山労働同盟会」の旗を立て、同盟会の腕章をつけて、鉱山の構内に入った。連絡をとってあった数人の鉱夫が駆けつけて先頭に立つ。事務所から、選鉱場から、長屋から、男たち女たちが飛びだしてきた。歓迎の目と憎悪の目があった。

憎悪の目は、飯場頭の下にいて鉱夫たちを奴隷のように扱う、命知らずの荒くれ男たちのものだ。労働組合が飯場制度の否定につながることを、彼らは知っている。同盟会一行の構内デモにおそいかかろうとする者もあった。そんな男には綱島が、「法学士弁護士」の肩書のある名刺をつきつけると、相手はこっけいなくらいにひるんだ。

日がくれかかっていた。ここでのデモンストレーションは、もうじゅうぶんだ。あとは口から口へ、今夜のうちには鉱山の全労働者に同盟会の来たことが伝わるだろう。

兩顧問と足尾の三人は軽便鉄道で釜石町へ向い、小山と高尾の二人は鉾山ちかくの村の旅館にとまった。この状況をもうすこしさぐっておくためである。

夜九時、山の村は冷え冷えする深い闇のなかだ。高尾が火鉢の灰をならしては、火箸で何か書いている。

「何ば、しとると？」

「あはは、くせですたい」

長崎生れの高尾と熊本生れの小山は、二人でいると、時折九州言葉になる。

小学校を出ただけの高尾は、暇さえあれば火鉢の灰や地面に字を書いて勉強してきた。その癖がいまだにひよいと出るという。

そのときだった。庭の闇から、

「やい、東京のやつ、出てこい！」

野太い声でたてつつけにどなっている。宿の主人が、あれは飯場の親分です、出てはいけません、と止める。

小山と高尾が顔を見合わせた。どうする？　ここで負けていたら組合結成はできません。よし、やろう。二人とも喧嘩には自信があった。

「よおし、待ってろ！」

二人で庭に出た。まっくらで、よく見えない。人影、と思えたところへ小山が、からだをぶつけるように踏みこんだ。とたんにピストルの轟音だった。闇の男がかまえたピストルが小山の肩ののって、はずみで引金が引かれたらしい。かなりの大男のようだった。

「馬鹿！」

高尾が一喝して男の頬にこぶしを打ちこんだ。男は倒れ、すぐに起き上がり、闇にかけこんで行った。

部屋にもどって固いふとんにくるまったが、北国の晩秋の夜はさむい。風が谷を吹きぬける。落葉が庭を走る。

まっくらな中で、小山が話しかけた。

「たまげたよ、おれ」

高尾は、いまさっきの襲撃のことと思った。

「あはは……小山さんがいきなり目の前にきて、あいつ、めんくらったんでしょう」

「いや、山のもみじだ、おどろいた」

小山の目の底に、昼間の紅葉がまた浮んでいたのだ。

しばらくして、高尾が、「それですねえ！」と、つよくうなずいた。

「ばってん、小山さんも変ったお人ですたい……」

翌朝、顔を洗いに外へ出ると、庭には一面の落葉で、その上に霜がおりていた。目を上げると、山々の紅葉が半分以上落葉して、裸木が目立っていた。

（高尾平兵衛はこの夜から三年あまりのち、赤化防止団の団長に射殺された。）

小山と高尾は、朝はやくから鉾山構内を歩きまわった。山の斜面をインクラインでのぼり、トロッコ道をたどって坑道の入口に出る。「おはやござんす」と挨拶していく鉾夫が多い。「気をおつけなすって……」と注意してくれる者もある。見えかくれに二人のあとをつけてくる人間がい